

巴県檔案に見る訴願と官府の対応 —同治時代の2つの事件から見た—

小野 達哉

はじめに

一 同治10年の「吃大戸」問題

- （一）団練からの訴
- （二）「吃大戸」の発生
- （三）官府の対応

二 同治11年の芝居小屋の路上建設問題

- （一）芝居の小屋掛け禁止をめぐる問題
- （二）土建業者からの訴願
- （三）官府の対応

おわりに

キーワード：巴県檔案、官府、紳糧、吃大戸、戯台

はじめに

中国の人々にとっては、訴願（訴訟と請願）が主な政治参加の方式だったと言われる¹。本稿はこのうち請願に当たる、官府へ地元の問題解決を願い出たケースの処理過程を素描する

が、それは訴願が如何なる過程を経て、地方行政の方策として実現したのかを探り出したいと考えたからである。官府に代表される国家の側の要求と、団練・街坊・同業行会などに代表される社会の側の要求が相互にぶつかり合う場合こそ、地方行政の現場ということになろう。民間社会の側の人々が訴願を起こしたとき、彼らは官府にどのような期待を掛けていたのだろうか。また、官府の側は訴願を受け取ると、その後どのような対応をとるのが大方のパターンだったのだろうか²。本稿の目的はまず巴県檔案のケースを通して、従来の研究に付け加えて新たな題材を提供し、国家・社会関係を考える一助とすることにある。

しかし、本稿で巴県檔案から題材を選んだのは、筆者なりにそれ以上の意図が込められている。同治時代の巴県は、太平天国軍の攻勢が同治2年（1863）を最後に収束した後、社会の

¹ 中国において訴訟・請願は同一の行為を指し、本来この2つを区別することに意味はない。ただ、本稿で論じるケースはどちらも、地方利益を代表して訴えを起こすという体裁を取っており、そのことを言い表す適切な用語を求めていたところ、江戸時代の国訴の研究で「訴願」という語が用いられているのが目に留まった（平川新『紛争と世論—近世民衆の政治参加』、東京大学出版会、1996年、第169頁など）。本報告もこれに倣い、ここでは訴願という用語を主に使用する。

² こうしたテーマを扱った先行研究として、筆者が念頭に置いているのは、熊遠報「清代徽州地方における地域紛争の構図—乾隆期婺源県西関壩訴訟を中心として—」『清代徽州地域社会史研究』汲古書院、2003

年、220—253頁。鷺尾浩幸「清末蘇州における地方自治の導入と基層社会の変化—水害発生時の報荒を通じて—」『東洋学報』、第92巻第3号、2010年、第59—89頁。鈴木秀光「清代刑事裁判における州県官の対応に関する一考察—淡新檔案の科刑事案を一例に—」『法制史研究』、第62号、2012年、第35—84頁。伍躍「必也使有訟乎—巴県檔案所見清末四川州県司法環境の一個側面—」『中国古代法律文獻研究』、第7輯、2013年、380—410頁などである。しかし、本稿ではそもそも訴訟・行政にかかわる論説はすべて先行研究に相当するから、ここに挙げたのも筆者がこれまで啓発を受けてきた論著に過ぎない。

再建期に入り、好景気の下にあって経済的には繁栄の時代を迎えていた。しかし、それは太平天国の混乱後の激しい人口の流動化を伴っていたから、下層貧民を大量に巴県へ呼び込むことにつながり、社会の不安定性をつねに抱え込むものともなっていた。さらに、都市部が商業・交通の中継地として、商旅の往来で経済が活気づいたのに対し、郷村部はそのような繁栄から取り残されたまま停滞した状態にあり、好況と言っても底の浅いものに過ぎず、すべての人々には恩恵が行き届かなかったのである³。巴県社会はつねに動揺し危機に晒される状態にあったものと言ってよい。

したがって、好景気の下にあるとはいっても、いったん自然災害・物価騰貴などのきっかけを得れば、社会不安が一挙に噴出することになったし、また、好景気の下にあるからこそ、莫大な収益の上がる利権をめぐる、紛争を却って頻発させることにもなるのであった。本稿では第1章を同治10年（1871）の「吃大戸」⁴事件の、第2章を同治11年（1872）の芝居小屋建設をめぐる問題の分析に充てるが、それぞれが社会危機下と好景気下に、郷村部と都市部で起こった対照性の露わなケースである。つまり、これらの事案が対照的であればあるほど、その処理過程に共通点が認められるとすれば、そこには単なるケーススタディーを越えた一般性が主張できるだろうし、また、事案の処理過

程にもし相違点があったとすれば、そこからさらに総合的に議論を組み立て直すことが可能となるだろう。

本稿で主に使用するのは、『巴県檔案（同治朝）』マイクロフィルムのうち「内政」に収められた史料群である。これらの一件書類は地方行政にかかわる問題をテーマに、各種の訴願と行政文書から構成されており、ここで扱うべき恰好の研究材料ということができよう。第1章の「吃大戸」事件は『巴県檔案（同治朝）』No295「巴県捩三里紳糧杜宇江等稟請示禁查拏痞匪結党成群借吃大戸為名擾掠擾惡索引私窃卷」によって、第2章の芝居小屋設営問題はNo307「廩生李承董等具稟跨街搭棚演戲危害多端協懇示嚴一案」によって、それぞれの事案を再構成し分析していくことにする。これらの事件は清末の巴県社会が大きく動いている中で、官府・社会の力関係がどのように働いていたのかに接近するための十分な素材となりうるものである⁵。

一 同治10年の「吃大戸」問題

（一）団練からの訴願

同治10年（1871）の巴県は、前年には水害、同年春には旱害に相次いで見舞われる中で、米価が高騰し貧民たちの暮らしを直撃していた。彼ら貧民は生活苦に喘いで流浪化し、社会不安

³ 巴県の経済環境については、陳瀛濤編『近代重慶城市史』四川大学出版社、1991年、第380-420頁。Madeleine Zelin; "The Right of Tenants in Mid-Qing Sichuan: A Study of Land-Related Lawsuits in The Baxian Archives", *Journal of Asian Studies* 45 (3) (1986): 499-526. 邱澎生「国法与帮規：清代前記重慶的船運紛糾解決機制」『明清法律運作中的權力与文化』聯經出版事業公司、2009年、第276-301頁などを参照。

⁴ 「吃大戸」の表記は、「吃」字と「喫」字のどちらを使うべきか難しいが、巴県檔案では例外なく「吃」字が

使用されていること、後掲の『朱自清選集』が繁体字印刷にもかかわらず「吃」字を使用していることに鑑み、本稿においても「喫」字は用いず、「吃」字で表記することにする。

⁵ 『巴県檔案（同治朝）』マイクロフィルムからの引用は、檔案番号、姓名、為事、日付で表記した。なお、史料の引用中に付した記号は、□が一字の欠字ないし判読不能を、……が二字以上の欠字ないし判読不能を、（ ）〔 〕は筆者が補った語句を表している。

が一挙に表面化しつつあったのである⁶。このとき巴県知県の李玉宣は対策として、同治10年(1871)3月から4月にかけて、商人による穀物の買いだめ・売り惜しみを禁止し、富農には手持ち穀物の過半の販売を促して、穀物流通量を増加させることで米価の引き下げを図ったが⁷、どれだけ効果が上がったのかはきわめて疑わしい。そうした最中にあるとき、山間僻地の団練⁸の紳糧⁹たちから、3つの訴願が相次いで巴県衙門へ持ち込まれてきた。これらを題材として、訴願が何を目的に起こされるものだったのか、考えてみることにしたい。

生ら(生員の自称)は郷村に僻居し、それぞれの資産に安住している。嘗て太平天国軍が境域を騒がしたが、現在は幸い静穏である。近ごろは無業の遊民が「食大戸」に名を借りて、50人・60人あるいは100人以上で集団をつくり、昼間は各家で強請をおこない、夜間は寺観で寝泊まりし、現地の無業の徒が流言を振れ回って、善良な者を騙したり脅したりするので、一家を挙げて

遠くへ避難し、禍乱を恐れて逃げ出す事態に陥っている。まして現在は春期の耕作が間近にあり、雨水にも恵まれていない。もし稟状で願い出て、禁止の告示を発してもらい、団練にしかと命じて駆逐するのでなければ、巨禍を醸成することになるだろう。どうか判断を仰いで、この地が均しく恩恵に与えられるようにしてほしい¹⁰。

この同治10年(1871)3月7日の訴願において、生員の杜字江ら紳糧たち15名が連名で、団練を代表して申し立ててきたのは、現今の食糧不足のときにあって他所から無業の悪徒が郷村部へ流入し、「吃大戸」に名を借りて50人・60人単位、あるいは100人単位で集団を結成し、日中は郷村の各戸に押し掛けて強請りたりをしたり、深夜は寺観に居座って宿泊をしたり、また、現地の悪徒と合流して不穏なうわさを流したりして、地元住民の生活を脅かしているという、治安が格段に悪化した情勢を告げる極めて危険な状態なのであった。さらにこれに次いで、同治10年(1871)3月13日には、節里5甲

⁶『巴県檔案(同治朝)』No.300、正里2甲・3甲貢生洪二如等、為協懇示諭事、同治10年3月23日。去因水災振濟已周、今遭乾旱米價日……貧民、困苦難堪、甚至衣食不繼、出外聯絡、不分男女、由十聚百、以百集千、不可勝弊、……吃大富。

⁷『巴県檔案(同治朝)』No.1263、巴県正堂全銜李玉宣、為嚴禁囤積以平市價事、同治10年3月28日。乃糧戶積穀不□、商販囤積居奇、以致米價貴一日、貧民買食維難、亟嚴禁囤積、以蘇民困、而靖地方。合行示諭、為此仰聞邑糧戶暨米販人等知悉。自示之後、該糧戶等務須將所存穀米即日減價糶賣、創行義拳、祇准按照人口、酌留食米、不得存留過半、以示限制。該商販等務須隨買隨賣、便民濟食、不得憑意囤積、擡價病民。

⁸ 同治時代の団練に期待された働きは、住民に紛争が起こったときには調停に努め、郷里社会の安定に寄与することであった。清代四川省の団練については、山田賢『移住民の秩序—清代四川地域社会史研究—』名古屋大学出版会、1995年、第141-147頁。山本進「清代四川の地方行政」『清代財政史研究』汲古書院、2002年、第245-249頁、を参照。また、巴県檔案を用いた

団練の研究として、梁勇「清代中期的団練与郷村社会—巴県為例—」『中国農史』、2010年第1期、第105-118頁。「团正与郷村社会的權力機構—以清代中期的巴県為例—」『中国農史』、2011年第2期、第93-100頁。凌鵬「清代中後期巴県地区『團』之社会性特徵——以『巴県檔案』相關案件為史料」『明清研究國際學術研討會會議論文』、2017年、未公刊はいずれも参照価値が高い。

⁹ 「紳糧」とは四川省の地域エリート層の呼称である。山田賢「『紳糧』と『公局』—清代四川の地域エリート—」山田賢前掲書、1995年、第188頁。

¹⁰ 『巴県檔案(同治朝)』No.295、文生杜字江等、為協懇示禁以安生業事、同治10年3月7日。情、生等僻居郷壤、各安恒業、前因髮匪擾境、今幸安靖。近有無業遊民、藉食大戸為名、或五六十、或百余人、成群結党、日則俟戶估索、夜則聚宿寺觀、以致本地無業之徒、布散流言、詐嚇良善、至有携家遠避、畏禍棄逃。況今春耕在邇、雨沢衍期、若不稟懇示禁、飭团驅逐、恐釀巨禍、為此協懇作主、地方均霽。

所属の団練5つの紳糧たちが8名の連名で、3月18日には、仁・節2里4つの甲所属の団練6つの紳糧たちが23名の連名で、それぞれほぼ同じ内容の訴願を巴県衙門へ提出してきたが、訴願の中にはそれぞれ、次のような文言が並べ立てられていた。

途端に來歴不明の者たちが、「吃大戸」に名を借り、30人・50人の集団を作り、人戸の多い場所では大人しくても、人戸が孤立した場所では、家内に勝手に押し入り、強請や窃盜をおこなって道理に従わず、訴えてやるぞと悪辣な脅しまでしている。忍耐して争いたくはないが、煩擾は堪えがたく、団練で捕縛したいが、拒補に遭い禍乱を醸成する恐れがある。さらに、悪党たちが長らく潜伏して力を得てしまうと、この地はどれほどの被害を受けることになるだろうか。生らは団練を編成しているといっても、民が民を裁くことはできない。どうか判断を仰いで、告示で駆逐したり、団練に捕送させたりして、将来の弊害を免れることができるように、この地を平穩に戻してほしい¹¹。

一体どうしたことか、悪徒たちが勢いに乗じ、10人・100人・数100人で集団を結成し、「吃大戸」に名を借り、機会に乗じては掠奪を恣にした。郷里はその力を恐れ、人々は供億させられている。悪党たちは思い通

りに謠言を振りまいて、ある県の匪族だとか、ある州の太平軍の逆徒だとか称し、続々と集まって盗みや騒ぎを起こしている。4里の人々は避難し、老少も逃げ出そうとしている上に、悪党たちは思いのままに行き来し、騒擾を引き起こしているのに、どうにもならない。こうした耐えがたい状態に置かれ、もし巨患を醸成することになったら、どれほどの被害に至ることになるだろうか。どうか判断を仰いで民生を静め、この地を平穩にしてほしい¹²。

ここでは、彼ら紳糧のような富裕者のみならず、一般住民までも悪徒たちのこうした行為に悩まされ、郷村からの退避や、悪漢への供億を余儀なくさせられたり、相手から「訴えてやる」と凄まじれたり¹³、生活危機に晒されている様相が描き出されたのであった。こうして、紳糧から一般住民まで含め、無業の悪徒を駆逐し排除することが、「民生を静め、この地を平穩にする」と言われるように、地方全体の公益を実現するものと主張されたのである。団練の紳糧たちが巴県衙門に要請したのは、悪漢たちのこうした無法行為を禁止する告示を出すこと、団練に命じて取り締まりに当たらせることの主に2つであった¹⁴。彼らの訴願は巴県知県の李玉宣から直ちに認可を得ることになる¹⁵。

ここで注意されるのは、団練の紳糧たちが一方では巴県衙門に支援を求め「作主」とは「知

¹¹ 『巴県檔案（同治朝）』No.295、監生王□洋等、為難民擾害協懇作主事、同治10年3月13日。忽有來歷不明之人、假以吃大戸為名、或三十成群、五十結黨、到人煙密處、稍能依理、至單邸獨戶、佔シ（門身）入室、惡索私竊、概不循理、動輒逞兇賭擲。欲忍不較、滋擾難堪、欲練團擒拏、又畏拒補釀禍、且畏匪類蔽姦、久聚得勢、地方受害胡底。生等雖練團之者、民不治民。為此協懇作主、或賞示禁逐、或練團獲送、俾免後患、而靖地方、德由恩便。

¹² 『巴県檔案（同治朝）』No.295、錫灘团首楊煥然等、為痞乘抗擾民難聊生事、同治10年3月18日。不料痞徒乘勢、百十結黨、數百成群、藉吃大戸為名、任意乘間搜

掠。黨鄉畏其勢、衆由便烹庖。痞乃自為得計、詭造謠言、輒稱某県号匪・某州髮逆、絡繹竄擾。又害四鄉搬避、老少奔逃。痞等或去或來、更得肆志恣擾、民等莫莫可何。似此民不堪命、如恐釀成巨患、害更無底。協叩賞查作主、以安民生、而靖地方。

¹³ 同前注11。「賭擲」とは、「とことんまで訴えてやる」という意味の常套句。

¹⁴ 同前注10・11。

¹⁵ 『巴県檔案（同治朝）』No.295、文生杜字江等、為協懇示禁以安生業事、同治10年3月7日。〔批〕候撫情示禁、一面飭团驅逐可也。

県自身のご判断を仰ぐ」つまり「自分に見方してくれ」という意味の常套句、「民が民を裁けない」と下手に出ていながら¹⁶、もう一方では、自分たち団練が悪徒の捕縛に当たるのを許可して欲しいと、強気の申し出をしていることである。このことは一見矛盾するように見えるが、いったい何を意味しているのであろうか。

(二)「吃大戸」の発生

「吃大戸」とは、「飢饉などで貧民が金持ちの所へ押し掛けて、食糧などを奪い取ったり食べたりすること」¹⁷という意味の用語で、今回の事件で言えば、貧民たちが米価の騰貴で生活苦に陥ったために住地から離散し、それぞれ数10人から数100人単位の集団を作って富家のもとに押し寄せ、食糧の供应を求めたという事象であった。20世紀の著名な文学者である朱自清は、1940年に四川省の成都に滞在していたときに、吃大戸について自らの見聞を次のように書き残している。同治時代から70年も年代が下った筆記であるが、同じ四川省の出来事でもあり、しかも慣行と特記されたものであるから、史料として引用することは許されるだろう。

民国30年の夏、筆者が成都に居住していたとき、いわゆる「吃大戸」の様相を知る機会を得た。それは穀物の収穫がままならず、旱天がつづき、米価が騰貴して容易に購入ができなくなったとき、貧民の一群が一方では米倉を搶奪したり、また一方では

富家に食べさせてもらったりするのである。彼らは富家のもとへ押し掛け、食事の供应をさせてから立ち去ったが、これを「吃大戸」と呼ぶ。吃大戸とは平和的手段であり、慣例から言っても拒絶してはならないものである。しかしながら、供应させられる人家は面白いはずがない。真に勢力を有した横暴な富家のもとには、貧民たちもわかっているのから、最初から食わせてもらいに行きはしない。自分から食べに行く富家は、供应させられても容認してやっている。このときはずっと、こうやって2・3日食わせてもらっていたが、地方によっては米を急遽廉売する所があったり、厳しく禁止する所があったりして、まもなく打ち切りになった¹⁸。

つまり、貧民にとっても富家にとっても、吃大戸とは一般に許容された行為であって、悪事だと思わず認識がそもそもなかったのである。おそらく、このことは貧民が飢餓状態に瀕したときは、富家が助け合うべきだという道徳観念に支えられており、富家も吃大戸を拒絶しないのが習わしだったからであろう¹⁹。それ故、団練の紳糧たちも貧民たちに押し掛けられて困りながらも、しばらくの間は手出しできずにいたのである。富家が供应の義務を果たさないと、貧民のほうで「訴えてやる」と凄むという、本来ならあり得ない立場の逆転もここから生じたものであった。

¹⁶ 同前注11。「民不治民」とは、「民は民を裁く権限がない」という意味の常套句。

¹⁷ 『中日大辞典（増訂第2版）』大修館書店、1987年、第256頁。

¹⁸ 朱自清「論吃飯」『朱自清選集』開明書局、1951年、188頁。三十年夏天、筆者在成都住家、知道了所謂吃大戸の情形。那正是青黄不接的時候、天又乾、米糧大漲價、並且不容易買到手。於是乎一群一群的貧民一面搶米倉、一面吃大戸。他們開大戸人家、讓他們煮出飯來吃了就走。這叫做吃大戸。吃大戸是和平的手段、照慣例是不能拒絕的、雖然被吃大戸的人家不樂意。当然

真正有精力的尤其有槍桿的大戸、窮人們也識相、是不敢去吃的。敢去吃的那些大戸、被吃了也好認了。那回一直這樣吃了兩三天、地面上一面趕奔平糶、一面嚴令禁止、纔打住了。

¹⁹ 吃大戸の專論はないようだが、著名人の伝記・回想の中にはしばしば記述が見られる。毛沢東も青年期の1910年、吃大戸の農民に父が運搬中の米を奪われたことがあったと会見記で語っている。毛は貧民を助けない父も、村民たちのやり方も共に悪いと思ったという。エドガー＝スノー『中国の赤い星』上（松岡洋子訳）、ちくま学芸文庫、1995年、第180頁。

しかし、彼ら紳糧たちも次第に貧民たちによる吃大戸の行為を耐え難く感じてきたのであろう。ついに、団練の住民を動員して実力行使し、吃大戸の貧民たちを駆逐する決意を固めたのであった。そのために訴願が巴県衙門に持ち込まれたが、そこでは、吃大戸の行為がもはや無辜の飢民の仕業を越えており、悪漢による騷擾・強奪の行為に他ならないとする図式が描かれねばならなかった。団練の紳糧たちにとって、それが貧民の吃大戸なら容認してやらねばならないが、悪徒たちの吃大戸を騙った強請り・脅迫の行為なら、駆逐したとしても何ら問題はない筈である。団練の3つの訴願がどれも、吃大戸に名を借りた悪辣な行為だと申し立てているのもそのためである。当然ながら、吃大戸の群衆の中には飢民のみならず、無業の悪徒たちも少なからず混在していたから、団練の紳糧たちの言い分にも幾分かの実情が含まれていたのは間違いない²⁰。

団練を組織するに当たっては、団規を作成し、巴県衙門の認可を得なければならなかったが、そこには一般的に「もし悪匪が集団を結成して地方を擾害したり、窃盗や強奪の行為に及んだりしたら、随時に団練に届け出て捕送し追究する」とか²¹、「来歴不明の悪匪が誰かの家で……衆人で擒送し、盜賊の原因を一掃する」²²などという条項が設けられていた。団練による実力行使を正当化するためにも、吃大戸の者たちが無辜の貧民であってはならなかった。団練の

紳糧たちは吃大戸について、これを悪徒の騷擾・強奪行為に他ならないものと見立て、排除すべき対象と申し立てたのである。彼ら紳糧たちは公益に借りて私益を実現しようとしていた²³。

団練が実力行使に乗り出し、吃大戸の貧民を駆逐した場合、トラブルが発生することは避けられない。貧民たちは団練に対し集団で拒捕するだろうから、血を見ることになるのは明らかで、多くの死傷者を伴うことになったであろう。彼ら団練の紳糧たちが訴願を起こしたのは、こうした事態を引き起こすに当たって、巴県衙門の支持と保証を事前に得ておく必要があったからである。彼ら紳糧たちが訴願を開始するときに下手に出たのは、吃大戸の悪業ぶりを誇張するためであった。したがって、巴県知県の李玉宣からゴーサインを得れば、その後には、団練による吃大戸の鎮圧作戦がつづくはずであった。「団練の監正・郷約・保甲らは、直ちに銅鑼を鳴らして団練の人々を集め、悪徒を各自捕縛し巴県衙門へ身柄を送付せよ²⁴。」彼らが訴願を起こしたのは、団練が吃大戸の貧民たちに対し、暴力を行使しても罪に問われないという保証を、こうして得ることができたからである。

(三) 官府の対応

官府もまた団練の紳糧たちと同様に、自己利益の最大化を目指している。それは社会の流動化が激しさを増す中では、まずは統治の安定を

²⁰ 『巴県檔案（同治朝）』No.300、正里2甲・3甲貢生洪二如等、為協懇示諭事、同治10年3月23日。……吃大富、誠恐良莠不一、姦險難測、聚匪混雜、恐滋重件、貽害地方。

²¹ 『巴県檔案（同治朝）』No.106、太平場の団規の1条。遇有痞匪結党成群、擾害地方、及盜竊搶奪、隨時投団送究。

²² 『巴県檔案（同治朝）』No.108、崇因坊の団規の1条。不明奸匪誰家……衆擒送、以清盜源。

²³ 中国における公私の概念には様々な定義付けがある

が、本稿ではとりえず公益を地元全体の利益、私益を個別利益と考えておけば、当面の議論を進める上で差し障りはないように思う。

²⁴ 『巴県檔案（同治朝）』No.295、巴県正堂全銜李、為出示嚴禁事、同治10年3月20日。除稟批示並會堂查拏外、合亟出示嚴禁。為此示仰閭閻軍民人等知悉。爾等務須照常安業、勿庸驚惶搬動。倘有不法之徒、仍前勾結痞匪、假吃大戸名目、估討估借、擄掠騷擾者、許該監団約保等、立即鳴鑼集團、按名獲送來県、以憑尽法懲弁、決不姑寬。各宜凜遵毋違。

実現する点にあっただろう。同治10年（1871）の吃大戸のケースでは、巴県知県の李玉宣は団練の要望をそのまま受け入れる姿勢を示し、無法行為を禁止する布告を出すとともに、団練の住民で取り締まりに当たることを指示した²⁵。李玉宣はこの告示を巴県所属のすべての団練に向けて発送したから²⁶、これ以後はすべての団練が住民を動員し、吃大戸を駆逐・排除するために実力行使をしても問題ないことになったのである。

さらにそれに加えて、巴県知県の李玉宣は專城汛に緑営兵の出動も依頼し²⁷、捕役を派遣して緑営兵の巡回を案内させるという措置も取った²⁸。このとき緑営兵は出動後、訴願の舞台となった仁里・節里の市場町を中心に巡回へ赴き、団練の行動を支援して吃大戸の捕縛に当たることになったのである。李玉宣は社会不安の高まりを力づくで押さえ込む方針へ大きく傾いたのであった。李玉宣の取った措置は、団練の紳糧たちに一方的に肩入れするものだったが、こうした官府の対応は何に由来するのだろうか。

団練が吃大戸の問題を訴えてきた請願はほかにも、『巴県檔案（同治朝）』No.300の中にそれぞれ、3月23日・4月24日・4月26日の3件を見出すことができるが、このうち注目に値するのが、同治10年（1871）3月23日、正里2甲・3甲の団練の紳糧たちが提起してきたケースである。

興隆場・□□場・北陪の各鎮では、衆人を糾合して求食に余念がなく、数100人が押

し寄せてきて、その数はなお増大するばかりである。原因を考えたところ、郷村部に居住して……、店舗を借りて商いをしていた者が、米価の高騰で生活費が不足し、借金もできないのに、地主は強いて押銀を与えないために、逼迫して貧苦……のである。強請りばかりで禍乱を醸成するのは、誠に不屈きなことである。生員らは郷村部・都市部の団練の紳糧たちを召集して商議した結果、生活が苦しい者は地主から（押銀の多寡を計って）返還を受け、当座の生計費に充てさせた上で、それぞれ仕事に励むよう訓戒し、他所に流亡して徒党を組む、安逸を求めて暮らしが台無しにならないようにさせる。集団は速やかに解散させ、……無業の徒も日々の食事が満足にできれば、求食のために離散することもなくなるであろう²⁹。

これは正里2甲・3甲の団練の紳糧たちが協議の末、貧民が流浪化し吃大戸の行為に走るのを防ぐために、地主から押銀（敷金）を返還する方針で合意したことを報告したものである。おそらく貧民たちに押銀の一部を与えて当面の生活費を賄わせる一方、仕事に励ませて現住地に定着させようという意図にもとづくものであろう。李玉宣は吃大戸の無法行為を厳禁するのと併せて、この紳糧たちの提案も即座に認可して布告を出すことになった³⁰。つまり、巴県知

²⁵ 同前注15。

²⁶ 『巴県檔案（同治朝）』No.295、刑房呈、同治10年3月某日。查三里紳糧稟示禁吃大戸各情、業已示諭通郷。

²⁷ 『巴県檔案（同治朝）』No.295、巴県正堂全銜李、為移会查拏事、同治10年3月20日。為此合移貴部庁、請煩查照事理、希即親身束装、選派幹練自□多名過県、帶同敵役、前往仁節二里一代地方訪查。

²⁸ 『巴県檔案（同治朝）』No.295、巴県正堂全銜李、為飭差查拏事、同治10年3月20日。為此票仰該役前去、即在仁節二里一帶地方嚴密訪查。

²⁹ 『巴県檔案（同治朝）』No.300、正里2甲3甲貢生洪二如等、為協懇示諭事、同治10年3月23日。……興隆場・□□場・北陪各鎮、聚衆估食不暇、數百相偪甚

近、愈糾愈多。推原其故、或郷居……、佃舖做芸、因見米糧昂漲、日用不敷、無所告貸、而主人措其押佃、不能量給、致逼貧苦……。至估索滋禍、實屬不成事体。生等爰集郷街各団紳糧酌商、凡□□活困苦、自向主人酌……寡退給、以濟目前之急、一面規戒、各勤各業、毋得逃外結夥、希因便益、廢□曠功、聚者速散、……庶無遊手之徒、日食可度、何有逼食之流。

³⁰ 『巴県檔案（同治朝）』No.300、巴県正堂全銜李玉宣、為拋□示禁事。除稟批示外、合行出示嚴禁、為此示仰各団紳糧軍民・諸色人等知悉。自示之後、凡屬佃居貧民如……自向田主酌量押銀多寡退給、以濟目前之急、毋得結匪聯□聚家估食滋禍、聚者速散、各安恒業。

県の李玉宣としては、団練の紳糧たちが連名で提出してきたものであれば、団練の住民を動員し吃大戸の飢民を駆逐するという強硬策も、貧民に押銀の一部を返却して生活費に充てさせ、彼らが吃大戸に加入するのを防ぐという柔軟策も、どちらにも即座に承諾を与えていたことがわかるのである。

李玉宣は何らかの政策的方向性をもって、紳糧たちに肩入れをしていたのではない。むしろ紳糧たちが団練を代表して要請してきたものは、何であれ容認していたのである。事実、同治10年（1871）4月24日の訴願は、慈里・智里の紳糧たちが連名で、悪徒の騷擾行為を団練が取り締まれるように求めてきたもの³¹。4月26日の訴願は、孝里6甲の団練が吃大戸の飢民が集団で大害をなすと訴え出てきたものだが³²、これまた李玉宣は批示の中で、団練が掃討作戦に移ることを承認した上で³³、既に布告を出して指示済みである旨を伝えている³⁴。ここでも団練を代表しての訴願は直ちに認可され、それぞれが行動に移った場合も、巴県から支持を得られることが保証されたのであった。

このときの巴県では郷村各地で広範囲に吃大戸が発生し、社会不安が一挙に顕在化する危機に直面していたと言ってよい。官府は吃大戸を鎮静化させ、統治の安定を図らねばならなかったが、そのために団練の紳糧たちを恃みとしていたのである。団練にもともと期待された役目

とは、住民間に紛争が起こったときには調停に尽力し、郷村部に不審者が入り込んだときには摘発するなど、郷里社会の安定に寄与することであった。団練の紳糧たちはそうした役目を一手に請け負ってきたのであり、これを裏返して言えば、巴県衙門は彼ら紳糧に団練の運営を丸投げしてきたのであった。

したがって、事の起りが団練の紳糧からの要請にある以上、巴県知県の李玉宣には、それを認可するほかに選択肢のなかったことを意味していた。団練の紳糧たちは自分の意志を達成するために、実力行使をする決意を既に固めており、必要なのは後になってから問題化することのないように、巴県衙門から事前に保証を取り付けておくことだけだったからである。李玉宣が彼ら紳糧たちへ一方的に肩入れするに当たっては、このような背景が存在していたことを考え合わせなければならない。

二 同治11年の芝居小屋の路上建設問題

（一）芝居の小屋掛け禁止をめぐる問題

同治11年（1872）7月8日、廩生の李承董ら都市在住の紳糧たち10名が連名で、芝居小屋が街路上に設営されていることを問題視し、巴県衙門に訴願を提出してきた³⁵。彼らは10箇条を挙げて芝居の小屋掛けを指弾したが³⁶、批判の鋒先は、廟会が巴県城内の祭祀で芝居を奉納す

³¹『巴県檔案（同治朝）』内政No.300、慈智各甲紳糧傅德三等、為協懇作主事、同治10年4月24日。

³²『巴県檔案（同治朝）』No.300、孝里6甲民呂応章等、為炕場情慘協叩作主事、同治10年4月26日。

³³『巴県檔案（同治朝）』No.300、慈智各甲紳糧傅德三等、為協懇作主事、同治10年4月24日。〔批〕如有不法匪徒騷擾地方、准即捆送來県、以憑尽法懲治。此諭。

³⁴『巴県檔案（同治朝）』No.300。孝里6甲民呂応章等、為炕場情慘協叩作主事、同治10年4月26日。〔批〕已出示嚴禁矣、着即知照。

³⁵芝居の舞台が街路の上に立ち並び賑わう光景は、巫仁如氏の論著の中で江南地方のケースが活写されている。巫仁如『優游坊廂：明清江南城市的休閒消費与空間変遷』中央研究院近代史研究所、2013年、第33-40頁。

³⁶『巴県檔案（同治朝）』No.307、廩生李承董等、為跨街……害多端協懇嚴禁事、同治11年7月8日。紳糧たちが非難した10箇条は次の通り。①芝居の小屋掛けのために、営業停止を余儀なくされる店舗が出る。②火災が発生する危険が大きい。③人出でごった返す中に悪徒が集まるため、通行人の金品が盗まれたり、④婦人が辱めに遭ったり、⑤運搬中の貨物が隙を見て盗まれたりする。⑥人出を避けて遠回りすると時間の浪費になる。⑦芝居小屋の備品を壊すと賠償させられる。⑧廟会の会首が近隣の店舗に寄付を強要する。⑨官員が通行するとき、芝居小屋の下を通らねばならず不敬に当たる。⑩考試に人々が集まったときトラブルが発生する危険が高い。

るときに、街路を跨いで芝居小屋を建てて上演をおこなうために³⁷、人出でごった返して通行の妨げになる上に、公序良俗にも反するという点に集中していた。芝居の興行は10余日どころか³⁸、1カ月以上に渡ることも珍しくなく、それが各街坊で挙行されたものだから³⁹、巴県城内では1年中どこかで芝居の上演がおこなわれていたことになろう。それだけ往来の妨げも喧噪ぶりも長期に及ぶと非難したのであった。

しかし、このことはかえって、芝居の上演が廟神への奉納だけを目的としたのではなく、営利事業として成り立っていたことを露わにするものでもあった。芝居の上演は無論タダで観客に提供されたが⁴⁰、廟会にとっては芝居を梃子に多くの客寄せを目論んだり、芝居の上演を口実に近隣へ寄付を求めたりと⁴¹、廟の収益の増加に貢献させるという期待もあったのである。さらに、芝居の小屋掛けをはじめ関連業者の利益まで考え合わせれば、芝居の興行は大きな収入源であり、舞台を掛けるのが莫大な収益を生む利権になっていたのである。本章では、こうして都市部が好景気を謳歌している最中、訴願に対し官府が如何に処理しようとしたのか、その過程を再現し分析していくことにする。

李承董ら10名の紳糧がこの訴えを起こすに当たり、どのような利害関係が背景にあったのかは定かでない。芝居の小屋掛けの利権に介入を

図ったのかもしれないし、街路を塞がれて営業妨害を被る商旅や、他の利害対立がある業者を擁護したのかもしれないが、どれも想像の域を出ない。しかし、彼らは芝居小屋を路上に設営するのが、公序良俗に反すると主張する保守的立場を前面に打ち出してきた。事が公序良俗にかかわる場合には、禁令が容易に発せられる傾向にあったからである。

巴県衙門はこれまでも度々、祭祀や祝祭の場での人々の振る舞いに対し、取締りの禁令を発してきたことが知られる。同治3年(1863)12月13日には、三聖宮での芝居上演のときに緑営兵が乱暴を働いたために、彼らの出入りを禁止する布告が出されたし⁴²、同治9年(1870)1月11日には、元宵節の祝祭において、街坊に人々が山車や車灯を繰り出し、男女乱れて騒ぎ立てるのを禁止する布告が出された⁴³。また、同治1年(1861)以降は毎年12月に、真武山・覺林寺の年節や各廟・会館の祭祀の場において騒ぎを起こすことを厳禁する布告も出されている⁴⁴。李承董ら紳糧たちの正論も尊重されねばならなかったのである。

事実、彼らによる芝居小屋取り締まりの要求は執拗であった。同治11年(1872)8月1日、李承董ら10名の紳糧たちは、重慶府衙門・川東衙門にも同じ内容の訴願を提出している⁴⁵。巴県知県の李玉宣は訴願を受理した7月時点で既

³⁷ 同前注。惟街坊土地会、跨街搭台演戲、弊竇叢生。

³⁸ 同前注。一遇会期、往往窺其弱門、將台搭塞舖口、致十余日生理斷絶。

³⁹ 同前注。至今其風復熾、各街坊演戲、幾至月余之久、行人無不……。

⁴⁰ 濱島敦俊『総管信仰—近世江南農村社会と民間宗教—』研文出版、2001年、第11頁。村芝居は専ら住民たちの寄付で賄われていたものが、不景気の煽りを受けて不振を来している様相が描かれている。

⁴¹ 田仲一成『中国祭祀演劇研究』東京大学東洋文化研究所、1981年、第289-293頁。氏が述べたのは主として明末の江南地方のケースであるが、こうした営利目的の性格は清末にかけて時代が下るほど、また好景気の

条件が加わるほど、全国的に（とくに大都市部においては）強まっていったものと考えられる。

⁴² 『巴県檔案（同治朝）』No.334、九間屠行首士左大順等、稟摺示禁神約均沾事、同治3年12月13日。

⁴³ 『巴県檔案（同治朝）』内政No.324、署巴県正堂田秀栗、為示禁事、同治9年1月11日。元宵節の喧噪ぶりについては、陳熙遠『中国夜未眠—明清時期的元宵・夜禁与狂歡—』『中央研究院歴史語言研究所集刊』、第75本第2分、2004年、第284-316頁を参照。

⁴⁴ 『巴県檔案（同治朝）』No.341、巴県正堂全銜張秉堃、為示禁事、同治1年12月9日。

⁴⁵ 『巴県檔案（同治朝）』No.307、廩生李承董等、為跨街演戲滋害多端懇賞示禁事、同治11年8月1日。

に、芝居小屋の路上設営を禁止する布告を出す判断を固めていたらしいが⁴⁶、そうした彼のもとへ重慶府からも回答を求める批示が届けられてきた⁴⁷。李玉宣は芝居小屋の問題について、上級衙門からも催促を受ける立場に立たされたのである。

しかも、芝居小屋を街路の上に建てるのはそもそも、律例に違反する不法行為であった。

都市や鄉村において、もし街路上に小屋掛けし、灯明を懸けて夜晚に戯唱の上演をしたら、主犯の者は違制律に照らして杖一百・枷号一箇月とする。郷役・保甲がこれを逮捕しなければ、不応重律に照らして杖八十とする。文武の各官がこれを実行しなければ、各部において議処する。もし郷役・保甲が事に託けて強請りを働いた場合は、索詐例に照らして処罰する⁴⁸。

知県がこうした取締りを怠って、闘毆・窃盗・誘拐・賭博などの不祥事を誘発した場合には、罰俸1年を課される処分の対象にもなっていた⁴⁹。巴県衙門にはこれを禁止しなければならない法的義務があったから、同治11年(1872)8月、ついに芝居小屋を街路上に建てるのを禁止することに踏み切ったのであった⁵⁰。

しかし、注意しなければならないのは、巴県知県の李玉宣は禁止の布告を出したほかには、

その執行を保証する措置を何も取ろうとはしなかったことである。李承董ら紳糧たちは訴願の中で、巴県衙門が緑営兵・捕役・郷約・保長らに手配し、随時に巡回させて取り締まりに当たらせるよう求めていたが⁵¹、それが実施に移された形跡は全くない。李玉宣は禁令を出すことまではしても、それ以上は紳糧の側に加担するつもりはなく、この件については明らかに及び腰であったと言ってよいのである。このことがおそらく、芝居小屋の敷設に利権を持った人々の反発を呼ぶことを、十分に承知していたからであろう。

(二) 土建業者からの訴願

芝居小屋が街路の上にまで立ち並び、多くの人出で賑わうというのは、好景気が到来したことを表すよい証拠である。芝居の興行は営利事業としても成り立っており、小屋掛けの仕事は大きな利権となっていた。にもかかわらず、それを禁止する布告が出たのだから、反発の声が上がるのは必至であろう。反対の声は、芝居小屋の架設に当たっていた土建業の元締めたちから上げられることになった。彼ら業者は同治11年(1872)8月から翌年の4月にかけて、3回にわたって巴県衙門へ執拗な反訴運動を仕掛けてきたのである。

⁴⁶ 巴県知県李玉宣の告示稿は、同治11年7月20日づけで作成されており、李承董らが重慶府・川東道に訴願を起こした8月1日より早い。『巴県檔案(同治朝)』No.307、巴県正堂全銜李、為提情示禁事、同治11年7月20日。除稟批示外、合行示禁。為此仰閭城監團・約保・会首人等知悉。□□爾果願酬神演戲、即可在於付近会館或空閑廟院借台酬唱、不許仍在街中搭台擁擠、以安行旅而杜絡窃。

⁴⁷ 『巴県檔案(同治朝)』No.307、廩生李承董等、為跨街演戲滋害多端懇賞示禁事、同治11年8月1日。府正堂瑞批。差酬神演戲、例所不禁、惟跨街搭台、實於地方有碍、仰巴県即便查明、如果弊竇多端、即行出示嚴禁、仍候道憲批示、稟發仍繳。

⁴⁸ 『読例存疑』刑律、雜犯、搬做雜劇。城市鄉村如有当

街搭台、懸灯唱演夜戲者、將為首之人、照違制律、杖一百・枷号一箇月。不行查拏之地方保甲、照不応重律、杖八十。不實力奉行之文武各官、交部議處。若鄉保人等有借端勒索者、照索詐例治罪。

⁴⁹ 同前注。謹按、(中略)處分則例、因唱演夜戲致生闘毆・窃盜・誘拐・賭博等事者、地方官罰俸一年。

⁵⁰ 『巴県檔案(同治朝)』No.307、歲貢李承董等、為違例藐示再懇嚴禁以肅法紀事、同治12年4月25日。去八月、生等以跨街演戲滋害多端並列十弊、稟府憲及恩轅、並沐恩批准、出示禁革在案。

⁵¹ 『巴県檔案(同治朝)』No.307、廩生李承董等、為跨街……害多端協懇嚴禁事、同治11年7月8日。為此協懇賞示嚴禁、並移知巡查。委主飭約保等遵照、倘敢放違、請將各会首等懲、以安行旅而杜絡窃、實為德便。

巴県衙門はこれまでも度々、祭祀や祝祭の場での人々の振る舞いに対し、取締りの禁令を発してきたことが知られる。そこで、反訴を起こした側は、公序良俗の問題に正面からぶつかるのを避ける作戦を立てた。土建業の元締めたちが反訴運動の当事者として前面に登場し、差務返上の問題を持ち出してきたのはそのためである。廟会やこれと利害関係のある紳糧たちが、その背後で暗躍していたことは疑いを入れない⁵²。

同治11年（1872）8月から翌年4月までの訴願で、土建業主たちが連名で一貫して主張したのは、芝居小屋の設営を禁止されると、彼らは仕事を失い廃業に追い込まれるために、これまで衙門のために負担してきた臨時の小屋掛けの差務を、揃って辞退せざるを得ないという申し立てなのであった。

舞台の設営が禁止され、小屋掛けが許されないのなら、蟻（一般庶民の自称）は舞台用の木材を売り払った上で、転業するほかに立ちゆく術がない。各衙門の差務についても、蟻らは辞退しなければならない。もし予め文書を提出し明確にしておかないと、差務が必要となきになって失態を出

し、罪を犯し累が及ぶことになろう。事実をもとに文書を提出するので判断を仰ぎ、蟻らが辞退するのを許し、小屋掛けの差務に応じるのを免除してくれば、多大な恩恵に感謝して止むことがない⁵³。

彼らが重慶の各衙門のために果たしてきた小屋掛けの差務は、1年間で合計30件に上るほど巨額であった⁵⁴。つまりは、差務の返上をちらつかせることで、巴県衙門に揺さぶりを掛けてきたのである。これまでもしばしば、同業ギルドが差務の負担の見返りに、官府から営業特権や保護を得ていたことが論じられてきたが⁵⁵、ここでは土建業主たちは差務の負担に託して、芝居小屋を街路の上に建てることの許可を得ようと、官府に掛け合っているのであった。一方、巴県知県の李玉宣も批示でこれまた一貫して、差務の負担をつづけるよう強硬に命じているが、

街路に跨って部隊の小屋掛けをするのは、もともと望ましいことではない。前に李承董らがくり返し弊害を訴えてきたので、批准して禁止したが、それは（公）議に適い、大局を考慮した上でのことである。お

⁵² 張映奎という紳士が土建屋たちに代わって訴状を提出したと、名指しで非難されている。『巴県檔案（同治朝）』No.307、歳貢李承董等、為違例藐示再懇嚴禁以肅法紀事、同治12年4月25日。殊該台戸等、否何賄申濫紳張映奎即星五等、代呈哀……肆行無忌、諸弊叢生、較前更熾。

⁵³ 『巴県檔案（同治朝）』No.307、民張子來等、為拋棄稟明事、同治11年8月18日。但台禁不容搭、蟻祇將戲台木料變売、另尋別業生活。至各衙差務、蟻等亦應辞退。若不預稟明晰、誠恐臨時誤差、貽累冒罪。拋棄稟明作主、賞准蟻等辞退、俾免認應搭台差務、恩倍再造。

⁵⁴ 彼らの務めていた差務の大半が、役所での舞台設営（搭台）であった点が注意される。『巴県檔案（同治朝）』No.307、計開五姓供弁應差搭台單、日付なし。一、学院搭武考馬窩子官棚差務。一、学院署內搭看步箭官棚差務。一、院署大巡搭演武官棚差務。一、恩衙搭月宮橋差務。一、朝天門外搭大慘演武官棚差務。

一、竜神祠閣廟祈雨差務。一、監倉搭台差務。一、打鎗堤操（手寅）官棚差務。一、骨塔搭台差務。一、応弁隨出票各處搭台差務。譚林氏應弁衙衙差務。一、府憲衙搭台差務。一、中營衙搭台差務。一、右營衙搭台差務。一、保赤所搭台差務。張子來應弁。一、道憲衙搭台差務。一、県学衙搭台差務。一、経庁衙搭台差務。一、塩関搭台差務。蔡合順應弁。一、左營衙搭台差務。一、左守副衙搭台差務。一、鎮憲衙搭台差務。一、字水書院搭台差務。達成良應弁。一、汛衙搭台差務。一、中營守副搭台差務。一、東川書院搭台差務。一、府東□□倉搭台差務。蘇福春應弁。一、恩憲署內搭台差務。一、朝天馬馬号搭台差務。一、府学衙搭台差務。一、会府搭台差務。

⁵⁵ 范金民「把持与应差：從巴県訴訟檔案看清代重慶的商賈行為」『歴史研究』、2009年第3期、第59—81頁。周琳「隱藏在条文背後的『秩序』——從中介貿易糾紛看清代中期重慶的『官牙』制——」『中国和世界歷史中的重慶』、重慶大学出版社、2013年、第154—160頁。

前たちの私益のために、地方に害を与えてはならない。現在（お前たちが）口実を設け牽制しようとするのは、実に（憎）むべきことである。旧例通り差務に応じさせ、こじつけにより辞退してはならない。もし失態があれば、お前たちの罪を問うて決して許さない⁵⁶。

土建業主のほうは李玉宣の足元を見透かし、完全にナメきっていた様子が窺われる。というのも、同治11年（1872）9月14日、彼ら土建業の元締め5名は連名で、前月の李玉宣のこの批示には素知らぬ顔で、いまだに批示を受け取っていないと言い立て⁵⁷、同じ内容の訴願を提出してきたばかりか、差務の負担の見返りに禁令を撤回するように、李玉宣に迫ることまでしたからである⁵⁸。巴県衙門はこれまで土建業主たちに法定外の差務を負担させてきた手前、完全に弱みを握られていたのであった。

結局、巴県知県の李玉宣と土建業者たちの応酬だけがその後もつづき、訴願じたいは硬着状態に陥ることになったが、同治12年（1873）4月に3度目の訴願を提出したところで、廟会と土建屋たちは、巴県知県がそもそもどういう姿勢でこの問題に臨んでいるのか、見極めを付けることができたのではないと思われる。事態はこの4月になって急展開を遂げるようになったからである。

（三）官府の対応

同治12年（1873）4月25日、廩生の李承董ら紳糧たち10名は連名で再び、巴県衙門・重慶府衙門・川東衙門にそれぞれ訴願を提出してきた。金舗会の会首たちが陝西街の路上に、孚佑帝君に奉納する名目で、芝居の小屋掛けと上演を強行しようとしているというのである。廟会・土建屋は禁令が出されて以来、しばらくは様子見を決め込んでいたが⁵⁹、ここに来て公然と芝居の小屋掛けを再開し始めたのであった。

生らが察知したところ、今月12日に陝西街の金舗会首の新盛・興隆・公（順）……らが、ついに孚佑帝君への奉納を理由に芝居を上演しようとしており、街前での振る舞いには全く憤みがない。生らが道理をもって斥けたが、怪しからぬことに告示を蔑ろにしている。彼らは富裕なのを恃んで乱暴であり、大勢を集めて勝手放題に及んでいる。生らはなす術がなく、芝居のチラシを添付するので、どうか調査の上で措置を取ってほしい。近日は各街で、彼らは重慶の各衙門で調整がなされている上に、差務の件も重大事だと言い募っている。生らでは彼らをどうすることもできない⁶⁰。

李承董らは現場に駆けつけて阻止しようとしたというが、敵方も強硬で埒が明かなかったために、今こそ官府の後ろ盾を得て、禁令による取り締まりを実現しようと、訴えを起こしてき

⁵⁶ 『巴県檔案（同治朝）』No.307、民張子来等、為掇実稟明事、同治11年8月18日。〔批〕跨街搭台、本不相宜。前掇李承董等瀝呈弊竇、批准禁止、係属□議僉同、因顧大局、不能以爾等一己之私有碍地方。現呈顯係藉端挟制、実属□□、着即遵照旧章应差、毋得牽話辞退。如有遺悞、惟爾是問不准、併飭。

⁵⁷ 『巴県檔案（同治朝）』No.307、本城民張子来、今於催状事、同治11年9月14日。蟻等迫於八月十八日以掇実稟明由、告期呈稟在案。查礼房已經檢李承董等稟案送署。至今月余、否何未沐批發。

⁵⁸ 同前注。……批發、或即撤示仍准、蟻等搭台应差。抑

或仍禁不搭、亦不应差、俾蟻等以遵行。

⁵⁹ 『巴県檔案（同治朝）』No.307、歲貢李承董等、為違例藐示再懇嚴禁以肅法紀事、同治12年4月25日。数月之間、各街肅清、行旅便之。

⁶⁰ 同前注。生等查知由本月十二日陝西街金舗会首新盛・興隆・公……始以□孚佑帝君会演戲、街前已属不恭。生等理斥不应藐示。伊等恃富行兇、統衆持橫。生等無何、只得將演戲報單□主、協懇查弁。近日各街、均有伊等吼称、文武衙門有内人為之調停、且差務為重。諒生等無如伊等何。

たのであった。しかし、このとき李玉宣から下った批示は「召喚の上で訊問し決定をおこなうのを待て（候喚訊察奪）」と、関係者の召喚を命じただけの誠に呆気ないものであった。つまり、紳糧たちに肩入れするものでもなく、禁令に言及するものでもなく、しかも事案じたいがここで打ち切りになってしまったのである⁶¹。このことはいったい何を意味しているのであろうか。

おそらくここには、好景気に沸き立ち社会が大きく動く中で、芝居小屋の架設に利権を持った人々をめぐる対立があったのであろう。李承董らの紳糧たちは商旅の往来・公序良俗という公益を掲げ、一方、土建業者やその背後にいる廟会・紳糧たちは差務負担の公益を掲げ、それぞれが自己利益の実現を目指して競合していたのである。しかも、彼らには実力行使をするだけの意志も能力も備わっていた。廟会・土建業の元締めたちが芝居小屋の建設を強行しようとしたのに対し、紳糧たちもそれを阻止するために現場まで押し掛けてきたことが知られるからである。

彼らはどちらも公益を楯にとって訴願を激しく展開したが、行政を自分の利権を保証してくれるものとして、利用し尽くそうと目論んでいたのである。このようなときに、巴県知県の李玉宣が解決を図ることは不可能であったし、どちらかに肩入れすることすら困難であったろう。結局は、芝居小屋の路上建設の件はその後、放置するに任されたままとなり、訴願者双方の力関係の下で、落ち着く所に落ち着くほかなかったのではないか。巴県知県の李玉宣は自分の出した告示を撤回することは決してなかったが、李承董らの意を受けて、廟会・土建屋連

中の行為を取り締まることも決してなかったのである。緑営兵・捕役らの動員は却って現場での騒動を誘発しかねない。

周知のように、官府は訴訟を受理してもなかなか判決を出さず、団練や親族の調停に回そうとする傾向が強かったし、また判決を出した場合であっても、それを執行するだけの行政手段が備わっていないことが多かった。李玉宣にとっても下手に手出しできない難題だったのであろう。こうした訴訟のケースと同様に、告示を形だけ出すのみで終いとする対応に明け暮れたのであった。官府の後ろ盾を求めて訴願が押し寄せて来ても、それらが利害関係の競合するものであると、官府は自己の判断（この場合は禁令の発布）を押し通す力もなかったし、かといって訴願の調停者として振る舞う力すらなかったのである。

実は、芝居小屋を路上に建てるのを禁止する布告が出たのは、今回が初めてのことでない。道光時代にも一度禁令が発せられたが、その後なし崩し的に芝居の小屋掛けが再開され、今日に至っていたのであった⁶²。おそらくは、このときと同様の経過をたどり、同じことが繰り返されることになるのであろう。芝居小屋が街路の上にまで立ち並び、多くの人出で賑わう光景がここに再現され、禁令はやがて顧みられなくなり、元の黙阿弥となってしまうのである。

おわりに

同治10年（1871）の「吃大戸」問題も、同治11年（1872）の芝居小屋の路上建設問題も、どちらも『民国巴県志』など地方志には全く記載

⁶¹ 『巴県檔案（同治朝）』No.307には、「票稿」（召喚状の草稿）も残されていないから、召喚すら実際に行われなかったらしい。

⁶² 『巴県檔案（同治朝）』No.307、廩生李承董等、為跨街

演戲滋害多端懇賞示禁事、同治11年8月1日。前道光年間、李主・朱主曾經禁革、行旅便之。至今其風復熾、各街坊演戲、幾至月余之久、行人無不稱恨。

がなく、後の時代には些細な出来事として忘れ去られてしまった事件である。しかし、そこからは同治時代の巴県社会が治安悪化の危機に直面している様相と、それが一転して好景気の時期を迎え、経済が活気づいている様相を窺い知ることができた。

さらに、そこからは巴県社会の人々が、公益に借りて私益を最大化しようと争う具体的様相を窺い知ることもできた。貧民たちは吃大戸に名を借りて、富家に強請りたかりをおこない、団練の紳糧たちは地方利益に借りて、こうした吃大戸を悪漢として駆逐・排除しようとしていた。都市部の一部の紳糧たちは、通行の不便や公序良俗の問題を列挙し、芝居小屋を街路に建てるのを禁止しようと働きかけ、一方、土建業の元締めたちは差務負担の公益を掲げて、芝居の小屋掛けの禁令を撤回させようと、それぞれが官府に詰め寄り押し掛けてきていたのであった。

彼らには多くの場合、実力行使をするだけの意志も能力も備わっていた。彼らが共通して官府に期待したのは、実力行使の後になって問題化・事件化することがないように、事前に保証と後ろ盾を得ておくことであった。行政も自分の利権の1つに数え上げ、利用できるだけ利用しようという目論みだったのである。

本稿は専ら紳糧たちが起こした訴願と、官府のそれへの対処の仕方を検討対象としたから、官府のほうは受け身の対応に終始しているように見えたかもしれない。しかし、官府にとって社会が大きく動く時代にあつては、最大の自己利益は安定した統治を実現することなのであった。紳糧たちが団練を代表して訴え出てきたとき、官府の側は概ねその要望を容認する傾向にあったが、それは紳糧たちに団練の仕事を丸投げしている以上、彼らが地方全体の利益を代表していると称する限り、それに肩入れするのが最善の策だと考えられたからである。

一方、芝居の小屋掛け問題のように利害対立の存在が露わな場合には、官府がどちらかに肩入れするのは著しく困難を来たし、調停で事を収めることもまた難題であったろう。官府はそのようなケースでは形式的な対応だけに止め、放置したままに任せざるを得なかったのである。訴願者が後ろ盾を求めて押し寄せてきたとしても、官府にはそれを左右するだけの行政力は欠如していると言ってよかった。吃大戸の一件では緑営兵・捕役を取り締まりに動員するのが事態の解決につながると期待されたのに対し、芝居小屋の一件ではそのことが現場でのトラブルを引き起こしかねなかった。換言すれば、官府が行政事業を推し進めるためには、地元社会の範囲で紳糧ら関係者の利害の一致が、その前提になければならなかったことを意味しているのである。